

# 光との調和への道 ——ジョージ・マクドナルドの想像力——

岡 隼人

『ファンタステイス』がわたしに現実にくれたこと、それは私の想像力を回心させたこと、いや受洗させたことであった。

——C・S・ルイス、『燃やしつくす火』

## 序論

ロマン主義時代と呼ばれる18世紀末から19世紀初頭までにおいて、想像力 (imagination) に対する見方は変わり、文学だけでなく様々な分野でその働きは見直され、重要性を増した。<sup>1</sup> そして、その重要視される見方は現代まで脈々と受け継がれてきている。<sup>2</sup> ロマン主義が後代の文学に残した影響を考える際に、その独自の自然観を除いて、想像力に対しての考えを変えたことがその最も大きな遺産と言っても過言ではない。その遺産を受け継いだ者の一人として、ジョージ・マクドナルド (George MacDonald, 1824-1905) がいる。竹野一雄が『想像力の巨匠たち——文学とキリスト教』の中でも述べているように、マクドナルドは「想像力の性質とその機能について独特の見解をもっていた」(198)。

マクドナルドは生涯をかけて神の存在を追い求めた。“All my life, I might nearly say, I have been trying to find that one Being” (Sadler 305). そんな彼が神の意志に近づける方法、あるいはそれへと向かう力として信じたものの一

つが想像力である。想像力にマクドナルドは人と神とのつながりを見出した。それは中心に向かって上昇する力である。マクドナルドは全存在の光、すなわち神は全創造の中心かつ天上にいると考えていた。“The whole system of the universe works upon this law—the driving of things upward towards the centre” (*Unspoken Sermons* 132). 逆に神に背を向けるものは深い闇へと落ちていく。これはマクドナルド作品に多く見られる構図であり、想像力の性質と働きに大いに関係性がある。本論文ではマクドナルドの作品にこの構図を見出しつつ、彼の「想像力の性質とその機能についての独特の見解」(竹野 198) を明らかにする。さらに彼が自身の作品において想像力を用いて、いかに中心にある光に向かって上昇する力を描いていたかを考察する。

### I. 想像力の二つの働き

マクドナルドはエッセー、“The Imagination: Its Functions and Its Culture” (1867) の中で想像力には二種類あると述べている。<sup>3</sup> 一つは神による想像力で、その想像力によって人間を含めた万物は想像（創造）されているのである (10)。人は一人ひとり神によって想像された存在であることから、神と人それぞれの直接のつながりをマクドナルドが信じていたことが分かる。もう一つは人による想像力である。人の想像力には二つの働きがある。「思い」(the thought) に形を与える働きと既存の創造物をつなぎ合わせる働きである。まず一つ目の働きについてマクドナルドは、人間の想像力は神聖なもので、神にとっての創造としての想像に当たるものであるとする。“[Imagination’s] operation is the same as that of the divine inasmuch as it does put thought into form” (7). 創造としての想像とはこの世にない全く新しい物

を創り出すことである。神の想像と人間の想像の類似性を示す一方で、創造としての想像は神にしか出来ない業なのだ、この点に関しては人間の踏み込める領域ではないことも強調している (2)。まずこの章ではマクドナルドの考える想像力の二つの働きを上述した順に見ていく。

マクドナルドは人の想像力の源は全て神からのものであるとして、人が想像して得る「思い」はどこから来たものなのかと問いかける。この問いは彼の集大成と言われる作品『リリス』(*Lilith: A Romance*, 1895)の中の主人公ヴェイン (Vane) と「希望」(Hope) との会話を想起させる。

「それでは、おまえの夢はどこから来たのだ？」

すると、“希望”はそう尋ねるのだ。

「ぼくのうちにある“陰の性”<sup>セルフ</sup>から、意識の光のなかに出てきたものだ」

「だが、おまえのうちにある“陰の性”<sup>セルフ</sup>は、そもそもどこからもたらされたのだ？ (・・・)」

「(・・・) あの幻影はどこから来た？ 今日まで踊ってきた生命は、どこから来た？ (・・・)」

人間は夢を見、また<sup>ねが</sup>希う。神は考え、意図し、促す。

(荒俣 508-09)

彼らの言う「陰の性」<sup>セルフ</sup>とは何か？ “The Imagination”の中でマクドナルドはこう述べる。“God sits in that chamber of our being in which the candle of our consciousness goes out in darkness, and sends forth from thence wonderful gifts into the light of that understanding which is His candle” (25). この引用内にある“that chamber of our being in which the candle of our consciousness

goes out in darkness” が先の「陰の性<sup>セルフ</sup>」だと考えるとヴェインと「希望」の会話も理解できる。つまり、マクドナルドは神が天上の中心だけでなく一人ひとりの中にも存在するという考えを持っていた。そして、神は我々の無意識の最も深い位置に座し、そこから「思い」を送ることで人の意識のレベルに働きかける。<sup>4</sup>

人の意識にある「思い」が浮かぶ時、それがどこから来たのか我々は説明できない。その「思い」こそが神が思った、あるいは想像（創造）した「思い」なのである。Kerry Dearborn は *Baptized Imagination* の中で想像力についてこう述べている。“MacDonald believed the imagination to be a powerful means by which God’s self-revelation could penetrate into the mind and heart of a person” (23). 人の想像力の働きの一つとして、人の意識に浮かんだ、あるいは神がその人の無意識の領域から意識の領域へと送り込んだ「思い」に形を与えて「見える」ようにする働きがあるとマクドナルドは考える (9)。その働きをより詳しく彼は以下のように記す。

The meanings are in those forms already, else they could be no garment of unveiling. God has made the world that it should thus serve his creature, developing in the service that imagination whose necessity meets. The man has but to light the lamp within the form: his imagination is the light, it is not the form. Straightway the shining thought makes the form visible, and becomes itself visible through the form. (5)

このように人の想像力は神が創造した「形態」(“the form”) の中にあるランプに明かりを灯す光であり、その光が形態の中に灯されることで、その光は

「輝ける思い」(“the shining thought”)に変化する。そして、輝ける思いが形態を可視化させ、形態を通じてその輝ける思いを我々が「見る」ことが出来るのである。例えば、ジョン・ダン (John Donne) の詩の中でも有名な“A Valediction: Forbidding Mourning”を例にとると、ダンはコンパスという形態を通じて愛しあう男女間の一体となっている魂を「見た」ことになる。人は想像力で以て創造物の中にあらかじめ用意されている意味も見出すことが出来る。マクドナルドは人が自然と調和すればするほど自然の中に多くの意味を見出すことが出来るのだと考えていた (18)。そしてこの能力に優れた者が詩人なのである。マクドナルドは詩人を“*maker*” (2) と呼び創造者である神の“*creation*”に近い者であるとして、詩人に準創造者としての資格を与えている。

人の意識にある「思い」が浮かぶ時と先述したが、ひらめきもこの一つである。マクドナルドはこれについて科学の実験を例にとり説明する。まず彼は科学のみで神の創造物である自然の真理を理解することは出来ないのだとして (2)、科学と想像力に密接な関係があることを主張する。科学には実験が付き物でそれによって新たな発見が為されるが、その実験内容を思いつく際に人は想像力を用いる。つまり実験を行うにはその元となる仮説を立てなければならない、その仮説は想像力による森羅万象の法則 (the laws of universe)、つまり神の法則との一時的な調和によって立てることが可能となるのである。

Every experiment has its origin in hypothesis; without the scaffolding of hypothesis, the house of science could never arise. And the construction of any hypothesis whatever is the work of imagination.

The man who cannot invent will never discover. The imagination often gets a glimpse of the law itself long before it is or can be *ascertained* to be a law. (13)

想像力の二つ目の働きは既存のものをつなぎ合わせる働きである。“This operation of the imagination in choosing, gathering and vitally combining the material of a new revelation, may be well illustrated from a certain employment of the poetic faculty in which our greatest poets have delighted” (22). マクドナルドにとって想像力の終着点は調和である。“For the end of imagination is harmony” (35). それは神の意志との調和である。そして、神の意志と調和しつつある者は自らの内面における調和も進んでいるのだ。

For all is God's; and the man who is growing into harmony with His will, is growing into harmony with himself; all the hidden glories of his being are coming out into the light of humble consciousness; so that at the last he shall be a pure microcosm, faithfully reflecting, after his manner, the mighty macrocosm. (36)

マクドナルドは、神が創造物に自由を与えると共に地上においては皆バラバラな存在で個として分離され創造されたという見方をする。“For God made our individuality as well as, and a greater marvel than, our dependence; made our apartness from himself, that freedom should bind us divinely dearer to himself, with a new and inscrutable marvel of love” (*Unspoken Sermons* 118). このバラバラな存在を一体化へと導くのが各人による神の意志との合一である。なぜなら神の意志は一つなのであるから(“The Fantastic Imagination” 9)。そして、神の意志と調和するにつれて他者と調和することを可能にするのは

人の想像力なのである。マクドナルドの理想とする最も完成した形とは全創造物と全存在の中心にいる天上の神との一体化である。序論でも記したとおり、個々のものが調和してつながりを持てば持つほど、中心に向かって上へと神に近づくことが出来るのである。想像力によってつなぎ合わされ調和へと導かれるものの例として、人と神、そして人同士以外にマクドナルドは詩と歴史を挙げる。詩人は常人以上の想像力を用いて今までつながりを持たなかった創造物同士を、言葉を通じてつなぎ合わせ、最上の言語である詩的言語へと昇華させるのである (21-22)。そして歴史に関しては、このように述べている。“Without her [imagination's] influence no process of recording events can develop into a history” (16)。つまり、単発的な出来事の間隙を類推的な能力で以て埋めて、それらの断片をつなぎ合わせて歴史化するのも想像力の働きなのである。想像力は空間的だけでなく時間的なつながりももたらす。

以上、マクドナルドの考える想像力の二つの働きを示した。次章ではこの想像力の働きと序論で触れた光への上昇と闇への下降の構造を彼の初の長編ファンタジー『ファンタステス』 (*Phantastes: A Faerie Romance*, 1858) の中に見出してみたいと思う。

## II. 『ファンタステス』に見る想像力の働きと構造

『ファンタステス』というタイトルそのものが想像力を意味することから分かるように、この作品において想像力は大きな位置を占める。<sup>5</sup> マクドナルドが『ファンタステス』に付した一番目のエピグラフにはこうある。「ファンタステスはすべての姿どもを元の源よりいざなって新たな衣をす早くまと

わせることを得る」(22)。ここで、「ファンタステス」を想像力、「すべての姿ども」を「思い」、「元の源」を神あるいは神の想像、「新たな衣」を形態と置き換えるとこのエピグラフの記述が、第一章で考察したマクドナルドの考える想像力の働きに非常に近いものであることが分かる。<sup>6</sup> この想像力の働きを以て主人公のアノドス (Anodos) は現実世界に「新たな衣」を纏わせて、妖精の国 (Fairy Land) を知覚できるレベルで「見て」旅をしているのである。前章で確認した想像力の第二の働きを思い出せば、現実世界と「新たな衣」をつなぎ合わせるのも想像力によるものだと考えられる。ここで知覚、そして鉤括弧つきの「見て」という言葉を用いたが、その理由を述べるには、まず想像力の働きを阻害する要素について触れる必要があるだろう。

妖精の国の存在に半信半疑でいたアノドスはある晩、夢うつつ妖精の国に迷い込む。旅を続けるアノドスは森の中の小屋に住んでいるある一家に出会う。その一家の母親と娘は妖精の国に住んでいると信じているにもかかわらず、妖精の存在、あるいは目に見えないものを信じようとしない物質主義者の父親は自分たちが何の変哲もないただの森の中に住んでいると言い張る。<sup>7</sup> 妖精の国を旅していると信じていたアノドスは父親の顔を見て彼と握手を交わした途端、その存在を信じられないようになり想像力の効果は失われる。「新たな衣」が一時的に剥ぎ取られてしまうのである。

一瞬私は妖精の国なんていうものが殆ど信じられなくなった。私が家を出て以来経験したすべてのことが病める想像のとりとめのない夢であって、このあまりにうろうろしやすい肉体に働きかけて、旅をさせたのみか、実際の歩みが私を導いてきた境域を漠た



る幻影で充たしたのだとしか思えなくなった。(蜂谷 98)

アノドスは妖精の国を「見る」ことが「病める想像」の為す業とまで考えるが、妖精の国を信じる娘に目を向けると彼の想像力は息を吹き返して、「再び私は自分が妖精の国にいるのだと信じた」(98)。このように妖精の国は全ての者によって「見える」わけではなく、見えないもの(妖精)を信じる姿勢のある者にもみそれは想像力で以て知覚されて「見える」ようになるのである。<sup>8</sup>

妖精の国を知覚できない理由に見えないものを信じないことと物質主義的な考えに染まることがあったが、アノドスも人喰い鬼のいる「暗黒の教会」(the Church of Darkness)で「影」(the shadow of darkness)に取り憑かれてからは妖精の国にある様々な不思議なことや美しさも知覚できなくなり、全てが平凡で取るに足らないものへと成り下がる。旅も終わりに近づく頃、アノドスは己の「影」の正体が「自我」(the self)であることを悟る。「暗黒の教会」の闇の中から現れた「影」(自我)はアノドスと一体化して妖精の国の輝きを消し去り、想像力を阻害してその国を知覚できないようにする。光は失われて闇と化す。「闇が一筋射すところ、地も海も空もその部分はどうつろとなり、さびれ果て、心を悲しませた。影の新しい力のこの最初の発展において、一筋の闇だけが他を超えて伸び、無限に伸びるかと思えて遂には太陽のおもてを撃ち、その一撃のもとに太陽も衰えて光を失った」(蜂谷 112-13)。

マクドナルドが最も神に背く行いとして考えていたのは人が自我に執着することであった。自我に執着する者は光である神に背を向けた者であり、神の創造物からは孤立している。その状態をマクドナルドは“the dungeon of

self" (*Unspoken Sermons* 145) と呼ぶ。その恐ろしい描写が以下にある。

God in the dark can make a man thirst for the light, who never in the light sought but the dark. The cells of the prison may differ in degree of darkness; but they are all alike in this, that not a door opens but to payment. There is no day but the will of God, and he who is of the night cannot be for ever allowed to roam the day; unfelt, unprized, the light must be taken from him, that he may know what the darkness is. When the darkness is perfect, when he is totally without the light he has spent the light in slaying, then will he know darkness.

I think I have seen from afar something of the final prison of all, the innermost cell of the debtor of the universe; I will endeavor what I think it may be.

It is the vast outside; the ghastly dark beyond the gates of the city of which God is the light—where the evil dogs go ranging, silent as the dark, for there is no sound any more than sight.

(*Unspoken Sermons* 268-69)

神である光から頑迷にも顔を背き続ける者はその対極にある闇へと墮ちていき、“frenzy of aloneness” (*Unspoken Sermons* 271) を経験する。人は自我に囚われれば囚われるほど孤立していくが、その状態を救ってくれるのは想像力による神の意志への調和と、その意志との一体化が可能にする他の被造物とのつながりなのである。

For him whose idea is God's, and the image of God, his own being

is far too fragmentary and imperfect to be anything like good company. It is the lovely creatures God has made all around us, in them giving us himself, that, until we know him, save us from the frenzy of aloneness—for that aloneness is Self, Self, Self. The man who minds only himself must at last go mad if God did not interfere. (*Unspoken Sermons* 271)

「影」(自我)に取りつかれたアノドスは精神的に下降の一途をたどり、自らを英雄視して、そんな自分に酔っていたため「影」によって塔に幽閉される。それはあたかも上述した“the dungeon of self” (*Unspoken Sermons* 145) の如きである。しかし、騎士気取りで身に纏っていた鎖帷子と共に驕りの心を脱ぎ捨て、自分は英雄ではなく一人の人間なのだと自認すると、アノドスは彼を長い間苦しめていた「影」(自我)から解放される。

前章でマクドナルドは神が各人の無意識の最も深い位置に存在していると考えていたと述べたが、これは自我に固執する者は神に背を向ける者であるという彼の考え方とちょうど合致する。例えば、『リリス』において自我にしがみつくりリスのことをマーラ (Mara) は以下のように述べる。「『彼女はわたしたちから遠く離れています。自分自身の意識が創る地獄のなかにいます』」(荒俣408)。つまり、我々が自我に固執すればするほどその牢獄あるいは「意識の創る地獄」に囚われて、無意識とのつながりが断たれて、そこから送られる神の「思い」を受け入れることが出来ないのである。以上のように見えないものを信じない心、物質主義、そして自我に固執することが想像力を阻害する。それは、神の「思い」を受け付けなくしてしまうことを意味する。

次に、前章の想像力と科学の関係について、想像力が森羅万象の法則 (the laws of universe) との一時的な調和を可能にすると述べた。言い換えると想像力は神の真理や真の理想 (the Ideal) を垣間見せる働きを持つ。<sup>9</sup> *Unspoken Sermons* の中でマクドナルドはこう述べている。 “[A] true imagination is beholding a truth of God” (469). 妖精の国に迷い込んでしばらく旅を続けていたアノドスは大理石でできた美しい女性の像を目にする。そのあまりの美しさにその大理石の女性 (the marble lady) に恋をして、ピュグマリオンのようにその大理石が人間になることを願いながら愛の歌を詠う。すると大理石の女性は人間の女性となる。しかし、彼女はアノドスのもとから逃げるように走り去ってしまう。この大理石の女性こそが真の理想の体現者なのである。Rolland Hein も彼の著書、*The Harmony Within* の中で以下のように述べている。 “The marble lady appears to symbolize the spirit of the Ideal, or the Perfect, and, as such, is in MacDonald’s thought a surrogate for the divine Presence” (61). ここで重要なのは、アノドスの想像力で現実世界が妖精の国として知覚され、「見られ」てそこに真の理想を体現する大理石の女性を彼が発見、あるいは垣間見ることである。つまり彼の想像力が中心かつ天上にある真の理想を垣間見ることが可能にしている。なぜ想像力は垣間見せるだけなのか？なぜ全てを明らかにはしてくれないのか？マクドナルドはこう述べている。 “For thus a full revelation would not only be no revelation, but the destruction of all revelation” (*Unspoken Sermons* 28).

アノドスは大理石の女性を追い求めながら妖精の国を旅し続けるのだが、途中立ち寄った妖精の宮殿で彼女と再会する。しかし、その時も、彼が彼女に触れてはいけないという禁を犯して彼女の腕に触れて彼女を胸に抱こうと

してしまったため、彼女はまたもや彼の前から姿を消す。失意のうちに旅を続け、「選択が必要となるたびに私〔アノドス〕は必ず下へ導くらしい径を択んだ」(蜂谷207)。旅も終りに近づいて、ようやく「影」から解放されたアノドスは虚無を体現する狼のような怪物を自らの命を犠牲にして倒す。怪物と共に死んだ彼は大地と一体化する。「私が大地の胸に抱かれていると、大地全体と大地の多くの子らの一人ひとりが、私と一体となるのだった」(蜂谷311)。そして、彼は「一輪の大きなさくらそう」となり、彼の愛した大理石の女性に口づけされ彼女の胸に収められる(311-12)。以上のことから分かることは、人は第一の生においては真の理想や神の真理との完全な一体化は出来ないのである。それらは死後の第二の生によって成し遂げられる。ただし、それらは第一の生において想像力によって一時的ではあるが垣間見ることが出来るのだ。真の理想を垣間見ることによってそれは科学の実験段階前の仮説のように指標となり、我々人間はそれを目指して第一の生を生きていけるのである。

このテーマは『ファンタステス』の中で挿話的な役割をしているコスモ・フォン・ヴェールシュタール (Cosmo von Wehrstahl) の物語にも見られる。この物語はアノドスが妖精の宮殿内で読んだ本の一つで、主人公のコスモはある日怪しい骨董店で不思議な鏡を手に入れる。その鏡を部屋に飾り眺めていると、自分の部屋を映す鏡の中に悲しげな表情をした女性が入ってくる。驚いて自分の部屋を振り返って見るも、いつも通りの自分の部屋である。女性は鏡の中に一時的に現れるだけの存在である。この女性は明らかに真の理想を体現していた大理石の女性と同じ役割でコスモの前に触れることの出来ない存在として現れる。注の6に載せたように鏡と想像力は「不可思議な親

近さ」(159)を持っている。アノドスが想像力を通じて真の理想の体現者である大理石の女性を見ることが出来るように、コスモも鏡を通じて謎の美女を一時的に見ることが出来る。アノドスもコスモもそれぞれの女性に近づき警見は出来るものの、触れることは出来ない。

鏡の中の女性と直接会いたいという欲望からコスモは怪しげな魔法を使って鏡の中から現実世界に女性を連れ出すことに成功する。しかし、謎の女性はコスモに、もし本当に自分のことを愛しているのなら「私をあなた自身からも解放して下さい。鏡を叩き割って下さい」と告げて彼のもとを立ち去る(蜂谷 174)。このことを聞いたコスモは、彼女を愛してはいるが鏡を割り彼女と永遠に別れなければならぬかもしれないというジレンマに思い悩む。しかし、彼女への真の愛が勝ち、物語の最後に鏡を奪った宮廷の有力者であるフォン・シュタインワルト (Von Steinwald) の邸宅に侵入して鏡を割ることに成功する。そこで負った刺し傷によって瀕死の状態となりながらも、鏡の女性に再会したコスモは彼女の腕の中で微笑みながら安らかな永遠の眠りにつく。

「まあ、あなたが私を愛して下さいってことはもうよく分かっています。いとしいコスモさん。でもどうして死のことをおっしゃるのです。」

彼は答えなかった。彼の手は脇腹に押し当てられていた。彼女がよく見ると指の間からは血が湧き出ているのだった。彼女は力なく泣ききずれて彼に抱きついた。リーザが追いついたとき、彼女はご主人が蒼ざめた死に顔の上にひざまずいているのを見つけた。その顔は幽かな月の光の中にほほ笑んでいた。(181-82)

コスモの物語においても死が真の理想との一体化を可能にしている。

アノドスの物語に戻ろう。一輪のさくらそうになり大理石の女性に口づけされ彼女の胸に取められたアノドスは、次は空中に浮かび上がり真理あるいは真の理想の全てを悟る。『ファンタステス』においてアノドスが辿り着いた真理とは「人が他人の魂に最も接近しうるのは、愛されることではなくて愛することによってであること」（蜂谷 312）であった。愛されるために愛する人を我がものにしたり追い求めたりするのではなく、愛するからこそ手放すことも必要だということを大理石の女性はアノドスに、鏡の女性はコスモに伝えていた。この真理に辿り着いたとき、空中に浮かぶアノドスの目の前に輝ける朝日が昇る。光への上昇の構造がここに見られる。物理的にも精神的にもアノドスは上昇を遂げる。

以上のように、アノドスは想像力で現実の世界に「新たな衣」（22）を纏わせ妖精の国を知覚し、その中での旅の途中に真の理想を垣間見た。このことから妖精の国は現実の世界よりも、真理を示す役割として中心かつ上にある大いなる光に近い領域として描かれていることが分かる。そして、アノドスの想像力には前章で確認した「思い」を形にする働きとつなぎ合わせる働きが見られた。見えないものを信じない心、物質主義的な考え、そして自我に執着することが無意識の領域から送られる神の想像力から生まれた「思い」を意識の領域に辿り着かせるのを阻害し、その人間の想像力をも失わせる。そのため森の中の小屋にいた父親や「影」に取り憑かれたアノドスは妖精の国を知覚し、「見る」ことが出来なかった。

最後に、コスモの物語とアノドスの旅からも分かるようにマクドナルドは、想像力（鏡）は現実世界から逃避する手段ではなく、真の理想や神の真理へ

の調和へと導く手段として扱っていたことが分かる。想像力（鏡）に囚われてしまっただけではないのである。想像力と鏡ではないが、『リリース』において新たな感覚を身に付けて現実世界に帰還したヴェインもまたその感覚に囚われず、その感覚によって知覚される見えないものを手に入れようとしたり追い求めたりはしない。

ときどき、わたしはたくさんの本を見渡すことがある。たくさん  
の本が、なん다가風に吹かれてその固い表面にさざなみを起こ  
すように、ゆらゆらと揺いで見えることがある。いまにもそこが  
割れて、別の世界があらわれてきそうな気がするのだ。戸外に  
ふと足を向けたときになど、それに似た体験をすることがある。  
(・・・)。またときどきは、近くで囁き声を聞くこともある。ま  
るで、わたしを愛する何者かが話しかけているように。けれど、  
その声が伝える言葉をようやく理解しだしたとき、ささやきは終  
わり、なにもかもが静寂にかえる。(・・・)。「わたしは」そう  
した彼方からの交信を追い求めたりはしないようにしている。囁  
きが聞こえてくる。そうして消えていく——わたしはそれを止め  
ようとも思わない。(荒俣 509-10)

### 結論

神の想像力と似た人間の想像力には二つの働きがあった。「思い」に形を  
与える働きと既存の創造物をつなぎ合わせる働きである。大いなる光である  
神は全創造物の中心かつ天上に座し、また我々各人を想像（創造）し、その  
無意識の領域にも内在している。そして、そこから意識の領域に想像力で以



て創り出した「思い」を送り込む。見えないものを信じる心を持つ者、物質主義に染まらない者、そして自我に固執しない者はその「思い」を想像力で以て受け取り形にすることが出来て、神の意志との調和へと導かれる。想像力の最終到達点は神の意志との調和であった。神の意志と調和する者は内面的な調和へと向かうのと同時にバラバラに創造された全創造物同士でも調和へと導かれる。

天上の神、そして真の理想との完全な一体化や真理の全てを知ることは第一の生では果たすことが出来ないが、想像力は真の理想や神の真理を垣間見せて、我々人間に到達点を示す。ただし、我々は想像力による一時的なつながりに固執してはならず、逃避の手段としても考えてはいけない。むしろひらめきや無意識から送り込まれる「思い」を受け取り、それを指針にして第一の生を全うしなければならない。神の意志と調和すればするほど人は中心に向かって大いなる光のある天上へと近づける。マクドナルドの想像力、それは光との調和への道なのである。

#### 注

1. ロマン主義時代以前の時代において想像力はあまり顧みられなかった。論じられるにしても想像力の役割に大きなものは期待されていない。例えば、トマス・ホップズ (Thomas Hobbes, 1588-1679) は「記憶と想像力をほとんど同一視していた」(プレット 9)。ホップズは主著『リヴァイアサン』(*Leviathan*, 1651) の第一部第二章 “Of Imagination” の中で想像力について以下のように記している。“So that *Imagination* and *Memory*, are but one thing, which for diverse considerations hath diverse names” (15, sic). しかし、ロマン主義時代にはサミュエル・テイラー・コールリッジ (Samuel Taylor Coleridge) が『文学評伝』(*Biographia Literaria*,

1817) の第13章内で想像力と空想の峻別を試みた。そして、ロマン主義時代以降はというと、例えばチャールズ・R・ダーウィン (Charles R. Darwin) までも『人間の進化と性淘汰』(*The Descent of Man, and Selection in Relation to Sex*, 1871) の中で、想像力を人間の最高の特権の一つであるとまで言い放っている。“The Imagination is one of the highest prerogatives of man. By this faculty he unites, independently of the will, former images and ideas, and thus creates brilliant and novel results” (113). 尚、17世紀から19世紀にかけての想像力に対する見方の変遷は R. L. Brett 『空想と想像力』の中で詳細に論じられている。

2. 2010年にノーベル文学賞を受賞したことが記憶に新しいマリオ・バルガス・リョサ (Mario Vargas Llosa, 1936-) は「文学への情熱ともうひとつの現実の創造」というタイトルの来日講演の中で想像と創造に同じ働きを与え、それらによって創り出されるもうひとつの世界について語っている。
3. これ以降 “The Imagination” と略称する。尚、本論文の引用の中で出典元の記載のないものは全てこのテキストからの引用である。
4. Chris Brawley もマクドナルドの想像力について考察したエッセー、“The Ideal and the Shadow: George MacDonald’s *Phantastes*” の中で、マクドナルドが神の内在于する居場所として人間の無意識の領域を考えていたと主張している。“[A] fairy tale must offer up dreamlike images directly from the unconscious, which he [MacDonald] believed was the dwelling-place of God” (97).
5. 『ファンタステス』の訳者である蜂谷昭雄は「夢見る力と夢の力」とタイトルが付けられた解説の中で『ファンタステス』のタイトルについて以下のように述べている。『『ファンタステス』とはアリストテレスのいう『ファンタシア』(想像力)の能力を擬人化したフィニアス・フレッチャーの作品によって名付けられたもの』(324)。つまり『ファンタステス』は擬人化された想像力を意味する。
6. 『ファンタステス』の中にもエピグラフで見た想像力の働きに近い記述が見受けられる。

「鏡と人の想像力とはなんという不可思議な親近さがあることか。この

僕 [コスモ] の部屋だって鏡で見ると、元と同じであり、しかも同じでない。僕が起居している部屋をそのまま映しているだけではない。何か気に入った物語の中で、その部屋のことを読んでいるような気がする。そのありきたりなところはすっかり姿をひそめ、鏡がそれを事実の領域から芸術の国へとひっそらったのだ。そしてそれが僕の目の前に提示されたこと自体が、もともと殺風景だったものに興味深さの衣を着せかけたのだ。」(159)

そしてこの「芸術の国」あるいは妖精の国が我々の「想像力に訴え」(159)、周囲の世界を「幼児の眼に映るがごとくに啓示」する (159)。つまり、想像力は現実世界の一部のものに「興味深さの衣」を纏わせて「芸術の国」あるいは妖精の国に変化させ、それらの「国」が再び我々の想像力に訴えかけてより広範な世界を幼児の眼で「見」させて「自己の周囲の驚異に充ちた世界の真の意味と対面」させるのである (159)。

7. Adrian Gunther は彼のエッセー、“The Structure of George MacDonald’s *Phantastes*”の中で妖精の国を日常の現実へと減退させる物質主義者である父親について以下のように述べている。

Significantly his [Anodos’s] entrance into the cottage (and into the story) specifically associates him with the worst excess of a greedy materialism. . . . He [The father] is living in Fairy Land, yet ignorant of and impervious to it. Anodos, who left ‘normal reality’ behind when he entered Fairy Land, meets in him a character who can reduce even Fairy Land to ‘normal reality’ and sees none of the magical events, occurring all around him all the time. (48)

8. 想像力は全くの別世界を知覚するものではなく、現実世界に変化をもたらすことでその世界を妖精の国として知覚させ、「見せる」働きをしている。つまり現実世界が基盤となっているのである。このことについては、マクドナルド一家と仲の良かったルイス・キャロル (Lewis Carroll, 1832-98) が『続シルヴィーノとブルーノ』(*Sylvie and Bruno Concluded*, 1893) の序文の中でも人間の妖精に対する意識を三段階に分けて以下のように論じている。

I have supposed a Human being to be capable of various psychical states, with varying degrees of consciousness, as follows:

- a. the ordinary state, with no consciousness of the presence of Fairies;
- b. the “eerie” state in which, while conscious of actual surroundings, he is *also* [sic] conscious of the presence of Fairies;
- c. a form of trance, in which, while unconscious of actual surroundings, and apparently asleep, he (i.e. his immaterial essence) migrates to other scenes, in the actual world, or in Fairyland, and is conscious of the presence of Fairies. (661)

9. Brawley はエッセーの中で以下のように述べている。“The only proper vehicle for seeing the eternal through the temporal is the imagination, which for MacDonald is the best guide one may have” (95).

#### 引用・参考文献

- Brawley, Chris. “The Ideal and the Shadow: George MacDonald’s *Phantastes*.” *North Wind* 25 (2006): 91-112. *North Wind Online Digital Archive*. Web. 26 November 2011.
- Carroll, Lewis. Preface. *Sylvie and Bruno Concluded*. *The Complete Illustrated Works of Lewis Carroll*. Ed. Edward Guiliano. New York: Avenel Books, 1982. 659-65. Print.
- Coleridge, S. T. *Biographia Literaria*. Ed. J. Shawcross. Vol. 1. London: Oxford UP, 1962. Print.
- Darwin, Charles. *The Descent of Man, and Selection in Relation to Sex*. London: John Murray, 1906. Print.
- Dearborn, Kerry. *Baptized Imagination: The Theology of George MacDonald*. Aldershot, Hampshire: Ashgate, 2006. Print.
- Donne, John. “A Valediction: Forbidding Mourning.” *The Songs and Sonets of John Donne*. Cambridge: Harvard UP, 2009. 260-66. Print.

- Gunther, Adrian. "The Structure of George MacDonald's Phantastes," *North Wind* 12 (1993): 43-59. *North Wind Online Digital Archive*. Web. 26 November 2011.
- Hein, Rolland. *The Harmony Within: The Spiritual Vision of George MacDonald*. Eureka, CA: Sunrise Books Pub., 1989. Print.
- Hobbes, Thomas. *Leviathan*. London: J. M. Dent & Sons, 1949. Print.
- MacDonald, George. *Lilith: A Romance*. Grand Rapids, MI: Eerdmans, 2000. Print.
- . *Phantastes: A Faerie Romance*. Grand Rapids, MI: Eerdmans, 2000. Print.
- . "The Fantastic Imagination." *The Complete Fairy Tales*. Ed. U. C. Knoepfelmacher. London: Penguin, 1999. 3-10. Print.
- . "The Imagination: Its Functions and Its Culture." *A Dish of Orts*. Whitethorn, CA: Johannesen, 1996. 1-42. Print.
- . *Unspoken Sermons, Series I, II, III*. Whitethorn, CA: Johannesen, 1997. Print.
- Sadler, Glenn Edward. *An Expression of Character: The Letters of George MacDonald*. Grand Rapids, MI: Eerdmans, 1994. Print.
- C・S・ルイス（編）、中村妙子（訳）『燃やしつくす火——G・マクドナルドの言葉』東京、新教出版、1983.
- ジョージ・マクドナルド、荒俣宏（訳）『リリース』東京、筑摩書房、2007.
- ジョージ・マクドナルド、蜂谷昭雄（訳）『ファンタステス』東京、筑摩書房、1999.
- マリオ・バルガス＝リョサ、野谷文昭（訳）「文学への情熱ともうひとつの現実の創造」『すばる 2011年10月号』東京、集英社、2011. 150-65頁.
- R. L. プレット、児玉実英（訳）『空想と想像力』東京、研究者、1971.
- 竹野一雄『想像力の巨匠たち——文学とキリスト教』東京、彩流社、2003.